

第38回

西洋社会科学古典資料講習会

2018年11月5日(月)～7日(水)

一橋大学社会科学古典資料センター

2018

















ており、2018年度は中世写本の金箔装飾や破れたページの補修などを体験してもらいました。さらに学部生を対象とした中世写本とインキュナブラに関する講義を各1科目ずつ 2018年度に開講したほか、西洋法制史の講義におけるゲストスピーカーとして古文書解読のレクチャーも行いました。大学院生を対象とした博物館資料保存論の講義では毎年、ゲストスピーカーとして西洋貴重書の保存・展示に関するレクチャーを行っています。社会人に対しては、西洋古典資料保存講習会と西洋社会科学古典資料講習会を毎年それぞれ3日間ずつ開催しているほか、2016年度からは数週間にわたる保存修復のインターンシップやシンポジウムも実施しています。

### 参考文献

三浦定俊、佐野千絵、木川りか『文化財保存環境学』朝倉書店、2004年。











してみると、1冊1冊が異なる本文を持つ可能性が高いことになります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 55 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A.J. West. *The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios.* (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を 82 点 (現存するものの 1/3 以上) 所蔵しており、次いで明星大学の 11 点が続きます<sup>1)</sup>。

このように信頼できる本文に基づいて研究できるようにするためには、できる限り多くの「同じ本」が世の中に残っていて、アクセスできる (= 所蔵を調べることができる・利用できる) ことが大切です。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts.* (London: British Library, 2008; rev. ed. 2011: 邦訳『本：その歴史と未来』(ミュージアム図書 2011))において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に帯びる個性 (たとえばブックデザイン、来歴・書き入れ、製本など) を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。(読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本です。) この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約 30 年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』(1543) の初版と第 2 版約 600 冊の現物調査 (とくに書き入れの調査) を行いました [Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus* (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566). (Leiden: Brill, 2002)]. この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの体験談『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』(早川書房 2005) では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。この

ような現存する同一本・同一タイプの資料にできるだけ多く直接あたって調査する研究方法（悉皆調査）は、増えてきています。たとえば、先に触れた Shakespeare の First Folio の世界規模での現存調査（センサス）や William Morris による Kelmscott Press の代表作『チョーサー著作集』（1896）[いわゆる Kelmscott Chaucer] の世界規模での現存調査（センサス）<sup>2)</sup>、シェイクスピアの時代から十八世紀半ば頃までに、女性の観客や読者がどのように芝居や本とかかわり、初期段階でのシェイクスピアの普及でどのような役割を果たしたのか明らかにするための一環として、主として欧米の貴重書図書館に所蔵される 1590 年代から 1769 年までに刊行されたシェイクスピア刊本八百冊以上を対象に、所有者のサイン、蔵書票、書き入れなどの痕跡の大規模調査を行った北村紗衣の研究<sup>3)</sup> などがある。こうした学術研究を支えるためにも、各図書館が現物の古典資料をこれからも幅広く収集し、所蔵し、公開していくことが重要です。

現在のようなインターネット／デジタル時代に古典資料を扱う図書館員（古書籍業者を含む）にとって、古典資料がもつ個性、つまり本文（テキスト）、製本、来歴（provenance）、書き入れなど、印刷・出版・造本・所有・読書・利用に関わる歴史的「個性」を見抜くちからが、特に求められているように思われます。そして歴史的「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が不可欠です。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果（書誌類・論文など）を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。（図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。）



詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

- ・雪嶋宏一『西洋古版本の手ほどき 基礎編』（明治大学リバティアカデミー 2011）  
西洋書誌学の基本を知るうえで便利な日本語の文献。
- ・高野彰『洋書の話』増補版（丸善 1995）第2版（朗文堂 2014）  
記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。
- ・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009) 書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。

なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS)のサイト <http://rarebookschool.org> から HOME > Store > Books & Pamphlets とたどると、Tanselle の上記2点の冊子版が有料で販売されていますが、そこをクリックすると、Production Description に「Also available as a PDF file.」とリンクが貼られていて、そこをクリックすると PDF ファイルが無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）

- ・Marks in Books. (Cambridge, MA: Houghton Library, Harvard Univ., 1985) Harvard 大学の貴重書図書館 Houghton Library が所蔵する、さまざまな「個性」をもった本が紹介されています。

皆さんの図書館にもこのようなお宝が眠っているかもしれません。

- ・書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker. が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB)のサイト [https://www.ilab.org/sites/default/files/documentation\\_center/files/29\\_2\\_20abc\\_20forbookcollectors\\_20bob\\_20fleck.pdf](https://www.ilab.org/sites/default/files/documentation_center/files/29_2_20abc_20forbookcollectors_20bob_20fleck.pdf) から無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）Google で Carter, John. *ABC for Book Collectors* を検索し、最初の方に表示される ILAB のサイト内のものをクリックしても見つかります。

本書（第六版）の邦訳：『西洋書誌学入門』（図書出版社 1994）（ビブリオフィル叢書）

- ・安形麻理『デジタル書物学事始め』（勉誠出版 2010）  
最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知るうえで有用な本です。樫村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法：HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』（慶應義塾大学出版会 2010）も参考になります。

- ・紙の歴史については、従来の紙の歴史を扱った本と内容面で大きく異なるが、ローター・ミューラー『メディアとして紙の文化史』（東洋書林 2013）があり、興味深く読める。
- ・ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ『解説 アルキメデス写本：羊皮紙から甦った天才数学者』（光文社 2008）も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。
- ・書誌学・古典資料関連の web サイト（日本語）としては、私立大学図書館協会西洋古版本研究分科会のサイト「西洋古版本について学ぶサイト」  
[http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/early\\_p\\_book/abc-for-earlybooks/index.html](http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/early_p_book/abc-for-earlybooks/index.html)があります。

#### 【注】

- 1) シェイクスピアの最初の全集 First Folio(1623)の現存本の世界規模の所蔵調査については、Eric Rasmussen and Anthony James West, ed. *The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue*. (Palgrave Macmillan 2012)も出版されている。ここでは明星大学の所蔵点数は 12 点。明星大学の web サイト内の「The Shakespeare Folios Electronic Library」でも 12 冊と記載されている。編者の一人であるエリック・ラスムッセンの『シェイクスピアを追え！消えたファースト・フォリオ本の行方』（岩波書店 2014）が出版されている。
- 2) Peterson, William S. and S. H. Peterson. *The Kelmscott Chaucer: A Census*. (New Castle, DE: Oak Knoll Press, 2011)
- 3) 北村紗衣『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち：近世の観劇と読書』（白水社 2018）  
Huntington Library が所蔵する 1475 年から 1640 年までの英国ルネサンス期の刊本 7500 冊以上を対象に本への書き入れを調査した William H. Sherman. *Used Books: Marking Readers in Renaissance England*. (Univ. of Pennsylvania Press, 2007)もある。

# 貴重書の絵を読む 西洋図像学

馬場 幸栄

(一橋大学社会科学古典資料センター助教)

## 1. 「記号」としての図像

西洋貴重書には図像があふれています。挿絵、ヒストリエイテッド・イニシャル、プリンターズ・デバイス（プリンターズ・マーク）、透かし、表装の革、小口、等々さまざまな箇所に図像が存在します。それらの図像のなかには、単なる装飾ではなく、特定の「主題」(subject) を読者に伝達するための記号として配置されているものが少なくありません。本講義では、それらの図像を読み解く際に必要となる西洋図像学の基礎知識について、特にキリスト教美術において各人物を特定するための「持物」(じもつ attribute) に注目しながら解説します。

## 2. 神の図像

キリスト教には多くの教派が存在し、教派によって信仰のかたちは異なります。西ヨーロッパではローマ・カトリック教会、英国国教会、プロテスタント諸派が発展しましたが、これらの教派は三位一体論を持っていたため、神を図像で表現するときは父、子、聖霊という三つの位格（ペルソナ）がそれぞれ異なる図像で表現されました（ただし、概してプロテスタント諸派はローマ・カトリック教会のように積極的に図像表現をしません）。父なる神はしばしば、天上の光、文字、手、天使や雲に囲まれた男性、長い髭をたくわえた年配の男性などの姿で表現されます。子なる神イエスは登場場面によって幼子から壮年までさまざまな姿で描かれますが、頭の後ろに描かれた「光背」に十字のしるしが付いていることが多いため、聖人・聖女たちと一緒に描かれていてもすぐに区別することができます。聖霊は鳩の姿で描かれますが、これはイエスがヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けるときに聖霊が「鳩のように」天から降りてきたという新約聖書『ヨハネによる福音書』1:32 の記述に由来します。父なる神やイエスがときおり手にしている「宝珠」は全世界の象徴であり、神が世界を統べていることを表現しています。

### 3. 福音書記者の図像

新約聖書の冒頭にある四つの福音書はそれぞれマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによって記されたと伝えられています。マタイは人間、マルコはライオン、ルカは牡牛、ヨハネは鷲によって象徴されます。これらの生き物は旧約聖書の『エゼキエル書』1:5-14と新約聖書の『ヨハネの黙示録』4:6-8に登場する不思議な生き物の記述と一致します。ライオンが傍らに描かれる聖人は、マルコの他に、ライオンの足に刺さった棘を抜いてやったという逸話のある聖ヒエロニムスもいます。福音書記者ヨハネはパトモス島に流刑にされてそこで『ヨハネの黙示録』を書いたという伝承があるため、小さな島で文字を書いている姿が描かれることがあります。その画面に、ヨハネのインク壺を奪って書物の完成を妨げようとする悪魔が登場することもあります。

### 4. 天使と悪魔の図像

挿絵によく描かれる天使に、大天使ガブリエルと大天使ミカエルがいます。ガブリエルは受胎告知のためにマリアのもとへ遣わされた天使で、マリアの純潔を象徴する白百合を手を持っていることがあります。ミカエルは『ヨハネの黙示録』12:7-9において竜（サタン）と戦う場面が記されているため、大きな剣を持っていることがあります。人間に憑依したり誘惑したりする悪霊（あくれい、デーモン）は動物と人間が混ざったような奇怪な姿で表現されます。サタンはもともと「敵対する者」「妨害する者」を意味するヘブライ語の普通名詞でしたが、悪魔たちの王である魔王の名前としても使われるようになりました。さらに、新約聖書『ルカによる福音書』10:18にサタンが「天から落ちた」とあり、旧約聖書『イザヤ書』14:12に「明けの明星、曙の子」が「天から落ちた」という記述があるため、サタンと「明けの明星、曙の子」ルシファー（ラテン語で「光をもたらす者」）が同一視され、墮天使ルシファーが魔王サタンになったのだと言われるようになりました。

### 5. 聖職者と修道者の図像

ローマ・カトリック教会、英国国教会、一部のプロテスタント諸派には聖職者のヒエラルキーがあります。ローマ教皇は教皇冠を、司教（英国国教会では主教）は司教冠（ミトラ）を被った姿で描かれることが多いです。修道者は修道服姿で描かれます。修道会ごとに服装が異なるため、描かれた修道服の形や色が聖人・聖女を特定する手がかりとなります。たとえば、薄茶色の修道服に三つの結び目（清貧、貞潔、従順の象徴）のあるベルトを垂らしているのはフランシスコ会です。

## 6. 西洋貴重書の絵を読む

上述した西洋図像学の伝統を踏まえて西洋貴重書の絵を見直してみますと、それらの絵には本文同様に多くの情報が込められていることがわかります。アウグスティヌス『神の国』、カヴァーデイル聖書、ホップス『リバイアサン』等に描かれた図像を観察し、そこにどのような主題が表現されているか考えてみましょう。

### 参考文献

ホール, ジェイムズ著, 高階秀爾監修, 高橋達史他訳『新装版 西洋美術解説事典－  
絵画・彫刻における主題と象徴－』河出書房新社, 2004年.

# 『戦争と平和の法』はなぜ書かれたのか

山内 進

(一橋大学前学長・一橋大学名誉教授)

『戦争と平和の法』(1625年)は「国際法の父」と呼ばれたフーゴー・グロティウス(1583-1645年)によって書かれた法学の古典です。

「国際法の父」と呼ばれているように、グロティウスは近世ヨーロッパにおいて国際法学を開拓した思想家として有名ですが、最近の多くの研究者はグロティウスを「国際法の父」と呼ぶことに反対しています。その理由は様々ですが、大きく分けるところになります。

- 1 『戦争と平和の法』よりも前にすでに同様の著作が出されており、「国際法の父」と呼ぶべき者がいるとすれば、その栄誉はグロティウスの先行者に与えられねばならない、
- 2 『戦争と平和の法』は決して近代的な考え方を示していない。近代国際法という観点からすると、グロティウスとは違う法学者こそその出発点に位置する。
- 3 『戦争と平和の法』は国際法の著作というよりも、むしろヨーロッパ中世以来の「戦争法」に関する作品である。したがって、グロティウスを「国際法の父」とみることはできない。

たしかに、このような批判はかなり適切で、現在ではグロティウスだけを突出した「国際法の父」と呼ぶことは行われていません。『戦争と平和の法』がなお伝統的で、中世的要素をかなり多く含んでいることも確かだと思われまます。しかし、それでは、グロティウスとその主著は誤って高く評価され続けてきたのでしょうか。それは、もはやあまり重視しなくても良い存在なののでしょうか。

私はそうは考えません。誤解などがあつたとしても、彼の名声は誤りと言うにはあまりにも広くかつ長く維持されてきました。たしかに、『戦争と平和の法』はやはり近世ヨーロッパにおける革新的著作として高く評価されるに値する作品なのです。では、『戦争と平和の法』どのような意味で革新的なののでしょうか。これが、本講演の課題です。

私は、ここでは、この課題を「『戦争と平和の法』はなぜ書かれたのか」という観点

から考察したいと思います。言い換えれば、グロティウスはなぜ『戦争と平和の法』を書いたのでしょうか。どこにその革新性があるのでしょうか。私はこの問題を『戦争と平和の法』のなかの論述そのものとグロティウスの生涯のうちに探ろうと思います。優れた著作は作者の人生そして作者の時代と深く関係しているからです。

グロティウスが生まれたのはオランダのデルフトで、父は市長という名門でした。その後、グロティウスは神童と呼ばれるほどの才気をみせ、青年期には将来のオランダ共和国を担うのが確実と言うほどの役職にもつきました。しかし、政争にあって逮捕拘禁され、ようやくパリへと亡命しました。彼がそこで書いたのが『戦争と平和の法』です。これは三十年戦争勃発後のことでした。やがてグロティウスはスウェーデンのフランス大使となり、パリで活動しました。しかし、パリでの仕事は必ずしもうまくいかず、ついにストックホルムに出向いて辞任することになりました、その帰途、北海で嵐にあい、なんとか上陸するもののそれが元で客死します。死後によりやくオランダに戻り、埋葬されました。

グロティウスはその間に法学関係の著作のほかに、神学や歴史に関わる作品を多数書いています。グロティウスは純粋な学者ではなく、弁護士であり、政治家であり、外交官でした。いわば実務あるいは政治の現実をよく知っている人物でした。思想的には人文主義者で、当時もっとも近代的といわれたレイデン大学で学んでいました。人文主義者なので、ギリシア・ローマの古典に精通しており、とりわけローマ・ストア哲学の影響を強く受けていました。

その古典を論拠として、中世の神中心の世界観から離れて、人間理性に基づいた思想を構築することに努めました。グロティウスの自然法思想はこの理性中心の世界認識と堅く結びついています。

グロティウスの時代は、オランダ独立戦争の時代でした。戦争がいわば常態でしたし、スペイン・ポルトガルとの軋轢は東アジアまで及んでいました。また、オランダやヨーロッパ諸国の海外進出はアメリカにも及んでおり、そこでの先住民との様々な軋轢が知られていました。三十年戦争はフランスやスウェーデン、ドイツを巻き込んで、戦争の惨禍を示していました。グロティウスはこのような状態をみて、戦争についての考察を進めようとした。『戦争と平和の法』の序論に次の有名な言葉があります。

「わたしはキリスト教世界のいたるところで、蛮族にとってさえ恥ずべきこととされるような戦争に関する放縦さをみてきた。すなわち、人々が些細な理由からあるいはまったく理由もなしに武器へと殺到し、いったこれを手にすると、あたかも一片の布告によって公然と凶暴さが解き放たれ、あらゆる悪行が許されるかのように、神法および人法に対する尊敬の念が消え失せてしまう」。

グロティウスを『戦争と平和の法』の執筆へと向けたのはこのような恥ずべき状態を憂えてのことだ、といわれてきました。たしかに、そのとおりですが、おそらくそれだけではないと思われます。

それは、「戦争に関する放縦さ」が意味することです。「人々が些細な理由からあるいはまったく理由もなしに武器へと殺到」するというのは果たして国家間の戦争のことをいっているのでしょうか。もちろん、それを念頭においているのは時代状況からしても、他の箇所でのさまざまな記述からも明らかだと言ってよいのですが、なにか奇妙な感じがしなくはありません。あまりにも無規律だからです。むしろ、人々が勝手に武器に走るというのは、彼の時代に盛んに繰り広げられていた宗教戦争、宗教的内戦を指しているのではないのでしょうか。

オランダとスペインの争いはある意味でカトリックとカルヴァン派の内戦でした。イングランドでもフランスでも清教徒革命や聖バーソロミュー虐殺に象徴される両派の争いは凄絶でした。それどころか、グロティウスが失脚して生命の危機にすら及んだのはオランダ内部における分派争い、厳格なカルヴァン派と温和なカルヴァン派との争いに巻き込まれたものでした。近世ヨーロッパの人々は宗教的内戦に明け暮れていました。

この宗教的内戦は国家の権威よりも自身の宗教的信条や集団を優先させるものですから、非常に中世的でした。中世ではこのような内戦は私戦と呼ばれ、頻繁に行われていました。

グロティウスは『戦争と平和の法』で私戦もまた戦争の一形態であり、合法であることを強調しています。これではどうてい近代的とはいえない、と考えられたのも無理はありません。戦争は国家だけが行使できると言うのが近代の大原則だからです。しかし、グロティウスが私戦を含めて論じようとしたことには意味がありました。私戦は個人の自然権であるというのがグロティウスの認識でした。自己保存を自然的権利として措定したのは通例、ホブズだといわれていますが、その前にグロティウスが先駆的にその主張を行っていたのです。

グロティウスが『戦争と平和の法』を執筆する動機として「戦争に関する放縦さ」をあげていることはすでにみましたが、それはたしかに私戦を考慮してのことだったと思われます。私たちは、近代の感覚で「戦争と平和」というとその対象はすべからく国家であり、国際政治や国際法にのみかかわると考えがちです。しかし、それは「平和化された国家」が成立して以降の話で、グロティウスの時代にはなお内戦がごく一般的にみられる時代でした。したがって、グロティウスがいう「戦争と平和」は国家間だけでなく、言わば国内、というよりも国家成立以前の社会を含む概念である、という



ことを理解しなければなりませんし、グロティウスはそのようにこの言葉を使っていたと私は考えます。

国家成立以前の社会は、ホッブズによって自然状態と呼ばれました。この自然状態論はホッブズの創見で、ホッブズを最初とするとこれまで考えられてきました。しかし、実はその前に『戦争と平和の法』がある、というのが私の理解です。グロティウスは内戦状態に陥りがちな世界に、人の本来の権利を認めつつ、「平和」をもたらそうとしました。『戦争と平和の法』が書かれたひとつの大きな理由はここに 있습니다。これは革新的でした。講義ではこのことをもう少し詳しく明らかにしたいと考えます。

# 西洋貴重書の目録作成

高野 彰

(元跡見学園女子大学文学部教授)

## 必要な資料

- ① AACR2(英米目録規則第2版)の初期刊本に関する規定(2.12-2.18)
- ② L.C.の貴重書目録規則(1981年)  
Bibliographic description of rare books (Washington, D.C., Library of Congress, 1981)  
BDRB
- ③ 上記の翻訳『稀観書の書誌記述』(国立、一橋大学社会科学古典資料センター、1986)(一橋大学社会科学古典資料センターStudy series, no.11)
- ④ L.C.の貴重書目録規則 第2版(1991年)  
Bibliographic description of rare books (Washington, D.C., Library of Congress, 1991)  
BDRB2
- ⑤ L.C.の貴重書目録規則(2011年)  
Descriptive cataloging of rare materials(Books)(Washington, D.C., Cataloging Distribution Service, Library of Congress, 2011)DCRM(B)
- ⑥ 高野 彰『洋書の話』第2版(東京、朗文堂、2014)

## 目録規則の特徴と略史

目録規則はタイトルページなどから情報を「抽出」し、それを「転記」する方法と、資料の物理的な部分を「記述」する方法とを規定している。そして製造年は限定せず、総ての時代を網羅している。「転記」とは文字を書き取ることだが、その形は一般的な文章表示規則である「正字法」で行う。書誌学が採用している表示された形をそのまま写し取る「転写」とでは識別・同定に大きな差が出来る。

当初、図書は在庫管理され、帳簿に記帳されていた。帳簿は記載場所が少ない。限られたスペース内に表示するために、情報は抽出され、日常の表示(正字法)で記帳され

た。図書の数が少なければ、この程度の表示・識別力で十分である。カードの時代になっても記載場所は大幅に増えなかったため、これまでの慣習が受け継がれ、慣習は目録規則となった。コンピュータの時代に入り、表示スペースの問題はかなり改善されるが、図書の識別・同定力を高めようとする動きには結び付かなかった。

目録規則のこうした動きに平行して、英米の書誌学は19世紀末から飛躍的な発展をとげた。それを支えたのが図書の製造過程の知識に基づいて図書を分析する方法であった。その結果、同じ図書でありながらタイトルページの「転写」によって新しいタイトルページが発見されたり、(本文上に違いがあったり)、物理的な違いの発見など、これまで以上に多様な図書の存在が提示された。図書に対する分析力が生んだ成果である。

目録規則はこうした成果に対応できなかった。そこで目録規則は識別・同定力を高めるために、3つの条件を設定した。第1点目が資料の製造年の限定である。書誌学の成し遂げた成果の多くが1800年以前の資料に対してであったことから、対象とする資料の製造年を限定し、書誌学と同じ条件下で、前述の2点に対応しようとしたからである。『英米目録規則』が「初期刊本」の項を設け、製造年を限定したのは、第1の条件を充たすためであった。

そしてこの規則を補完する形で、LCは1981年にBibliographic description of rare books (BDRB)を定めた。「書誌記述」といっているが、目録規則である。BDRBは、序文で、「書誌的記述のために重要な特徴は一般の出版物からとるデータの要素を表示されているままに転記する」(下線は引用者)ことだと自慢している。しかしこれは過大な自慢でしかない。該当するのは表示「順序」だけであり、文字の「形」は依然として、表示されたままではなく、正字法で「形」を変えて転記しているからである。

目録規則の場合、タイトルページ等に対しては情報の「抽出」と正字法による「転記」という大原則が昔からある。そのためBDRBは大原則の一つである「抽出」という手法を出来るだけ用いないことで、2番目の問題に対処しようとした。しかし既存の大原則に固執する限り、識別・同定力に限界のあることは確かである。

そして3番目の「物理的な違い」とは形態の問題である。AACR2は「なくてもよいもの(広告、白紙ページなど)で番号づけない部分は無視する」と一般原則でうたった。「表示されたページや紙葉」を数える方式である。しかしこの方式では何も表示していない白ページや白紙の問題を処理できない。BDRBは「折丁」という考え方を導入せざるをえなかった。

ところがせっかく新しい解決方法を導入したにもかかわらず、「折丁」の機能を十分に認識していなかった。BDRBは「白ページ(紙葉)は一般的には数える」(下線は引用者)と明記した。誤解を招く内容が主文としてここまではっきりと規定されるのは

珍しい。おかげで、それに続いて示された但し書きが見落とされがちとなり、先の規定が一人歩きし出してしまった。

さすがにこの危険を LC は無視できなかったはずである。BDRB 第 2 版は不適切な主文を削除し、初版では「折記号に照らしてみて」で始まる但し書きの部分を主文に据えると共に、もう 1 文追加した。この追加規定も「折丁として認識できるならば」と「折丁」を判定基準にしている。

BDRB 第 2 版 (1991 年) は、条文に手を加えたが、書名には手を触れなかった。BDRB とは ISBD (下線は引用者) に引きづられた書名であろうが、作業の実態を反映していなかった。そこで 20 年後の 2011 年、LC は重い腰を上げ、改訂版を出し、書名を Descriptive cataloging of rare materials(Books)、即ち、「記述目録作業」に代えた。「書誌学的手法で目録を作成する」と言い換えたのである。自分たちの作業内容を書名と一致させたかったはずである。

初期刊本の規定は書誌学あるいは図書の製造過程の知識に基づいて問題に対応し、識別・同定力を高めようとしていることがわかる。

「折丁」というと、その集合である校合式が思い浮かぶ。目録作成に際して、この式を作成するのは面倒だということで、作成が避けられがちである。それに校合式は注記に表示するので、必須事項ではない。

それに対して同じく「折丁」を活用して記述する形態表示は必須である。「折丁」の知識は特別なものではなく、日常的に活用することが求められ出していたのである。そしてこの積み重ねが、いずれは校合式の作成へとつながっていくのではないだろうか。

「折丁」という手法が導入された。にもかかわらず、「折丁」がどのように機能し、どんな形で目録作成に役立つかはどこにも書いてない。目録規則は規則集であって、手引き書や解説書ではないということであろうか。

そこで講義では、拙著『洋書の話』(第 2 版) を使って折丁、判型について説明し、次いで、白ページ、白紙さらには同種の判断が求められる広告ページ(紙葉)、正誤表のページ(紙葉)と折丁との関係を取り上げる予定である。

# カビ処理の前に

吉川 博幸

(株式会社明治クリックス代表取締役社長)

## [初めに]

カビの処理件数は年々増えています。平成 21 年頃は年間の相談件数は 40 件程度だったものが平成 28 年には 100 件を超えるようになりました。そして、被害の規模も年々大掛かりなものになって最近では平均 40 万冊以上を処理しています。今や各大学共通の課題と言えるのではないのでしょうか。ここではカビ同定の重要性、環境整備、健康問題について触れます。

## [カビ同定の重要性]

弊社が処理した図書のカビで多いのは好乾性のアスペルギルス・レストリクタス、アスペルギルスペニシリオイデス等で 8 割を超えます。次にユーロチウム属が続きます。空間には色々なカビが浮遊していますが、湿度や栄養、温度などの環境条件によって繁殖できるカビの種類が異なってきます。自ずと処理方法も異なります。

処理前には先ずカビを同定して処理方法を決めますが、中でも薬剤の選定は重要です。多くの場合、薬剤は消毒用エタノールを使用しますが、現在多くの殺カビ剤があります。メーカーが薬剤の効果を見る場合はアスペルギルスニガー(クロコウジカビ)かクラドスポリウム(クロカビ)で行うことが多いので、問題になっているカビにその薬剤がどのように効くかどうかは必ずメーカーに確認する必要があります。

## [環境整備]

カビを防ぐには環境整備には施設課・設備課の協力が欠かせません。

### 1、立地と建物

大学の建物は斜面を切り開いた土地、川沿いや池沿いの土地など何れも地下に水脈が走っている土地に建っていることがあります。さらに日光の影響を避けるために書庫は地下にある場合が多いのです。もちろん地下の壁面には防水・防湿シートが使わ

れ、ドライエリアや地下のピットが設けられていますが、設計の都合で大きさや水はけの機能が十分ではない施設もあります。

## 2、設備

最近の空調システムはパッケージエアコンにされることが多いようです。これは天井に埋込み型の業務用のエアコンを入れ、中央監視室で各部屋の温湿度を把握して遠隔操作で温度を管理しているものです。またこれに熱交換型換気扇を併設する場合があります。これらは人間が快適に過ごすには十分ですが湿度コントロールが重要な書庫では十分とは言えません。

書庫内に集密書架が導入されるとさらに湿度コントロールが難しくなります。この集密書架の中心部では温度も湿度も上がる（蒸れる）と言われています。そこで除湿機と送風機で乾燥した空気を書架間の隅々に送って、書庫内における湿度が適切で均一になるようにコントロールしなければなりません。

### **[健康問題]**

カビはアレルギーでもあります。一定量を吸い込むと花粉症に似た症状が出ます。また真菌症は肺真菌症や皮膚真菌症が代表的です。何れも日和見感染と言われますが、カビの量と活性度も問題です。カビアレルギーも真菌症も「日和見感染」であり、健康な人には関係ないと思わずに、カビ被害の空間に入るときにはきちんとした防護が必要です。

アフラトキシンなどのカビ毒はナッツや米などにアスペルギルス・フラブス等が発生した時に生成されることがあります。これらを食べると肝臓がんになるリスクが高くなります。熱では分解されません。図書に出ていることは先ずありませんが、カビの同定はやはり重要です。

### **参考図書**

カビ検査マニュアル 高鳥浩介監修 テクノシステム 2009

# 図書館におけるカビ予防と対策

井上 桃子

(株式会社明治クリックス文化財 IPM 事業部係長)

## 【はじめに】

図書館から本のカビ被害について相談を受けたとき、伝えることは「環境を整えて再発（発生）を防ぐ」「適正な手段でカビを処理すること」この2点に集約されます。弊社はこの2点こそがカビから本を守ることだと考え提案を続けています。さらにこの提案を具体的にするためには、以下3つのステップを踏む必要があります。①被害状況を調査する②発生したカビの種類を調べる③発生原因を調べることです。図書館の力だけで、この3つのステップを踏むことは容易ではないため、どうしても「図書館のカビあるある」の状況に陥ってしまいがちです。「図書館カビあるある」とは、「カビが発生していて驚いた。放っておくわけにはいかず、取り急ぎ見える範囲で拭き取ったが、また生えてきた。」「とにかく湿度を下げようと、家庭用除湿器を導入したがカビ被害が拡大し続けている。」「毎年決まった時期にカビが生えてくる。カビのふき取りが恒例行事化している。」という状況です。①被害状況（を調査する）と③発生原因（を調べる）は、図書館が置かれている状況により千差万別ですが、②発生したカビの種類（を調べる）については、図書館のカビ被害のほとんどに共通する結果が出る人が多いです。また、カビについての知識があれば、少なくともカビがこれ以上に悪さしないように、ものごとを進めることができると考えます。以下、図書館でよく発生するカビの特徴を述べ、その上で環境を整えるとは、適正な手段でカビを処理することとは、という順で論を進めます。

## 【カビの特徴】

図書館でカビが発生する条件は湿度・温度・栄養で、中でも特に重要なのは湿度です。図書館で問題になるカビのほとんどは好乾性（こうかんせい）のカビです。好乾性のカビは、湿度65%以上で活性化します。比較的低い湿度で活性化するのが特徴で、湿度65%は人間にとっては快適な湿度であるため、気が付きにくいのです。

ちなみに、弊社の経験上、発生するカビは好乾性カビの中でも、アスペルギルス・レ

ストリクタスとアスペルギルス・ペニシリオイデスが 8 割、ユーロチウム属が 1 割、その他が 1 割です。これらのカビはどこからやってくるかというと、おおもとを辿れば土壌です。カビは基本的に孢子の状態です。孢子の大きさは 凡そ 3 ミクロン～100 ミクロンで、もちろん肉眼では見えません。孢子は単体、又はホコリと一緒に浮遊しています。孢子がものの表面に付着し、菌糸を伸ばし、目に見えるまでに成長したときに「カビに汚染された」という状態になります。

これを図書館に当てはめてみましょう。カビの孢子をたくさん付着させた土足で人が入ってくる、ホコリやカビが舞い本に付着する、湿度が 65%以上に達する・・・というわけです。カビが目に見える、ということはすでにカビは成長し、新たな孢子を産生しているため、カビは早期発見に越したことはありません。

### 【環境を整える】

図書館で発生するカビの特徴を知ったうえで、本が置かれている環境の話に移ります。再発（発生）させないためにはどうするか？それは活性する条件を避ける環境を整えてしまえば良いのです。一番重要なのは湿度管理です。湿度を 50%～55%で管理し、上限を 60%とします。また、カビの孢子はホコりに多く含まれていることから、ホコリを除去し清浄な状態を保つことも大切です。湿度を 50%～55%で管理するためには、人にとって快適な環境を整える機器（エアコンや、家庭用除湿器）では不十分な場合が多いです。書庫にとって最も効果的なのは業務用の除湿器を導入することになります。さらに集密書架があると空気が回りにくいため、より湿度コントロールは難しく、除湿器の風を書架の奥に送り込むための送風機も導入を検討することになります。

### 【正しい処理方法】

殺菌のことだけを考えると、世の中には様々な方法や薬剤が存在しますが、本に生えたカビを処理するには変色や劣化といった副作用は避けなければなりません。また、人が手に取るものであるため薬剤の残留性や安全の問題も考慮する必要があります。本の殺菌には安全で扱いやすく、しかも殺菌効果を得ることができる消毒用エタノールをお勧めします。

ただ、いきなり消毒用エタノールでカビを拭くと、汚れが伸びて本を汚損する可能性があります。そのため最初に吸引機や刷毛等でカビやホコリを物理的に除去して（乾式処理）から、消毒用エタノールで清拭作業（湿式処理）を行うようにしてください。クリーニングを行う際は作業者がカビを吸引しないように、N95 レベルのマスクを装着する、使い捨ての手袋を使用する等の防護も必要です。また、あまりにもカビが重



度化している場合は酸化エチレン製剤（商品名：エキヒューム S/公益財団法人文化財虫菌害研究所認定燻蒸ガス）によるガス燻蒸処理が有効です。ユーロチウム属のカビであった場合は成るべくガス燻蒸処理が確実です。ガス燻蒸処理は専門業者に依頼して下さい。

### 【おわりに】

図書館で発生するカビの多くは湿度 65%以上の環境で活性化します。ただ、なぜ湿度が 65%を超えてしまったか、というのは現場の数だけ原因があります。床がカーペットでホコリが溜まりやすいだとか、書庫が山の斜面を切り開いた場所にあるという立地的な問題等、様々です。被害の進行度や範囲によってもその後の対応が異なりますし、虫の問題を併発している場合も多々あります。本来現場を見ずしてカビ被害対策を語ることは難しいです。ただ、解決に導く手段を知っていれば、少しでも解決に向けて前進できるはずです。カビの早期発見方法や解決に向けてのステップで具体的に行われる内容については、当日の配布資料で画像や図を交え説明します。

## 西洋古典資料をもっと知るために

岡本 幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料は現代の本とは異なる点を多く持っている。印刷に用いられる紙は、麻(主として亜麻)のボロ(古着)を原料にした手漉き紙である。手漉き紙には様々な大きさの紙があり、印刷をした紙を折って折丁を形づくる。紙の方向を変えながら折畳むことによって2紙葉のフォリオ判、4紙葉のクォート判、8紙葉のオクタボ判などの折丁になる。印刷は鑄造活字の組版による活版印刷であり、印刷の終えた折丁の組版をばらして残りのテキストを印刷する。印刷が終わるまでに紙が替わる場合もある。校正や検閲などにより印刷が修正されてページが差し替えられる場合もある。印刷・出版と製本は別々に行われることが普通であって、出版時には仮とじの状態で開催され、所蔵者がそれぞれ製本を依頼する。同じ出版物であっても製本は異なったものになる。そのため西洋古版本には、所蔵の履歴が色濃く形態に反映されることになる。タイトルが同じでも同一の版とは限らず、同一の版であっても製本などの形態が異なる。出版された当時の姿のまま(仮とじ本)で今日まで伝わっている場合もある。安価で簡略な製本を施されて余白を大きく断裁されることもあれば、豪華で華麗な製本が施されてページの余白がたっぷりと保持される場合もある。製本が傷んで修復されたり、新たに製本される場合(再製本)もある。製本時にメモのための白紙が付け加えられたり、蔵書票が貼付されたり、本紙にメモやアンダーラインなどが書き込まれる場合もある。西洋古典資料には形態の履歴がある。製本の仕様は一様ではなく、製本構造や装飾様式、使用される材料の性質も多種多様である。

西洋古典資料の保存はこのような多様性を持った本を対象として取り組むことになる。どのような特徴を持った本がどのくらいあるのか、傷んでいる本がどれだけあってどんな傷み方をしているのかが具体的に分かると保存手段を考えやすくなる。これからも傷む可能性のある本を抽出することができて、研究価値、資料価値、稀少性などに加えて利用頻度、劣化の深刻さ、処置の緊急性などを勘案して保存手当ての優先度を定めることが出来ると、保存への体系的な取り組みが可能になる。このような情報を効率よく記録して分析するための手段が調査票である。

西洋古典資料の何を調査すればよいのだろうか。資料を保存する、つまりいつでも利用できる状態に管理しておくために必要な情報が得られることが大切である。それはモノとしての本の詳細なデータであり、具体的には、製本の構造、使用されている材料、構造と材料の性状と劣化状況である。それらの項目について以下に考察する。

## 1. 製本構造

西洋古典資料は現代の本とはまったく異なっている。歴史的に特有で異なった製本構造があって、それぞれが固有の力学的体系で成り立っている。製本構造の特徴は、主として表紙と中身の接続の仕方、折丁のとじ方、見返しの構造の違いに現れている。使用される材料とその性質が大きく異なっており、取扱いには注意が必要である。

### 1-1 とじの構造と材料

印刷を終えた紙葉を折って折丁ができると、糸でとじて連結してひとつのブロックにまとめる。西洋古典資料のとじの特徴は折丁の折り目の内側を綴じる「中とじ」であること、「とじ支持体(以後「支持体」と略す)」を利用して折丁をブロックにまとめていることである。折丁を「中とじ」する「とじ糸」は折丁の末端で糸どうしを絡めて結びを作る。しかし末端以外では糸どうしが絡み合うことはなく、多数の折丁をひとつのブロックにまとめられるのは支持体に糸を絡めて折丁を固定しているからである。支持体を用いた綴じを「支持体とじ」と呼ぶ。

支持体には様々な材料が使用され、とじ糸の絡め方も様々である。麻線維のロープや紐、テープ状の革(鞣し革、トーイング革)や羊皮紙・布テープなどが支持体として用いられる。とじ糸は麻糸(亜麻や大麻)であることが多い。とじ糸が支持体をくるりと一巻きしながらとじる方法と、巻かずに支持体の外側を通過して綴じる方法とがある。支持体を複数回巻き付けてから次へ進む場合もある。支持体2本を巻きつける場合もある。一方で複数折丁を1運針でとじる「抜きとじ」が行われる場合もある。「抜きとじ」が行われると、折丁ブロックのまとまりが緩くなる。作業時間が短いメリットがあるが、利用頻度による劣化の進行も速い。

とじの支持体に使われる技法と材料は、製本が健全な状態のときには確認が難しい。とじ糸の運針や折丁ノド、背表紙、見返し(効き紙)に現れる凹凸などから判断する。本の出版時には流通過程でバラバラにならない程度に本文紙葉をまとめた「仮とじ」が行われた。支持体を使わずにとじ糸どうしを絡めている。本格的なとじではなく、そのまま利用に供すると短期間でとじが損傷する可能性が高い。

1880年代頃に、糸または針金を使って機械でとじる方法が加わった。針金とじの場

合、支持体は寒冷紗のように背にあてがわれる丈夫な布である。各折丁が針金で布に固定されて、背の布が支持体のような役割をして折丁のブロックが形成される。針金とじの本は、湿度の影響で錆を生じて折丁紙葉が分離する場合がある。機械による糸とじの場合は布テープ支持体が付属しているが、とじの機能的役割は低い。接着剤の塗布によって折丁ブロックを形成している。西洋古典資料のとじはすべて中とじが基本であるが、平とじが部分的または全面的に用いられる場合もある。

## 1-2 表紙の接続と材料

表紙の芯材には木の板や厚紙が使われた。初期の厚紙は紙を貼り合わせて作ったペーストボードで 16 世紀～18 世紀まで使われた。その後はローブ繊維を使った硬いミルボードが用いられるようになり、19 世紀以降は現在と同じようなボール紙が使われた。

とじの終わった本は支持体を使って表紙ボードを接続した。折丁をとじて支持体で表紙ボードを接続する方法を「とじつけ製本」と呼んでいる。表紙と中身を接続してから表装材を貼る。非可逆的構造である。

表装材に穴を開け支持体を通して接続する方法を「リング製本」と呼んでいる。支持体だけでなく「はなぎれ芯材」も表装材の接続に使われる。表紙ボードが用いられる場合と用いられない場合とがあるが、支持体が接続するのは表装材のみである。使われる表装材のほとんどが羊皮紙であり、厚手の手漉き紙もある。表紙を仕上げしてから折丁ブロックと接続する。可逆的構造である。

とじた折丁ブロックとは別個に作った表紙を背貼布(寒冷紗)を援用して接着接続する方法を「くるみ製本」と呼んでいる。表装材を貼ってから折丁ブロックと接続する。上記それぞれの製本構造には複数のバリエーションがある。

表装に使われる皮革にはタンニン革、羊皮紙、トーイング革がある。革がボロボロになる化学的劣化現象は 19 世紀以降のタンニン革で起きている。その劣化の仕組みは十分に解明されていない。羊皮紙は湿度の変化に敏感で波打ちや縮み現象が起きやすいが、科学的劣化の心配がない。表面が丈夫で実用的製本に多く用いられる。トーイング革は時代の経過とともに柔軟性を失ってくる。トーイング革による製本は穴なしの背がほとんどで、背の柔軟性も失われる。

木版プリントやマーブル紙、ペーストペーパーなどの装飾紙が表装材として用いられたのは 18 世紀末からと考えられる。表紙の箔押し装飾の様式やマーブル紙の模様は製本年代特定の役に立つ。1820 年代には製本用クロスが開発された。製本クロスの登場によって、製本工程の機械化が始まった。

### 1-3 見返しの構造と材料

表紙と本(中身)との接続を内側から構造的に支えているのが「見返し」である。見返しは製本時に折丁ブロックに付け加えられる紙葉である。その付け加え方によって「とじ見返し」「巻き見返し」「貼り見返し」の種類がある。「とじ見返し」は見返し用紙が独立した折丁になっていて製本時にとじられる。いくつかのバリエーションがある。

「巻き見返し」は見返し用紙を最初と最後の折丁に巻きつけて折丁と共にとじている。「貼り見返し」は主として 19 世紀以降の方法で見返し用紙を最初と最後の折丁のノドに貼り付けている。見返しの構造によって、表紙開閉による負荷の影響の仕方が異なる。

見返しに使われた紙は、製本年代の特定に役立つことがある。用紙の原料の違い、簀の目の有無の違いは有用な情報であり、透かし文様があれば製本年代特定に役立つ。簀目のない手漉き紙は 18 世紀中ごろ以降に生産された。碎木パルプは 1860 年以降、化学パルプは 1880 年以降に実用化されたと考えられている。マーブル紙やペースト・ペーパーなどの装飾紙が用いられるのは 17 世紀以降である。マーブル紙の場合は時代による紋様の変遷があり、製本年代を特定できる可能性がある。

### 1-4 背表紙

表紙を開いて本を読むという行為から発生する負荷は、背の柔軟性と大きく関連している。背表紙の歴史的構造にはいくつかのバリエーションがある。大きく分けると背表紙に芯材の有るものと無いものがある。芯材が無い場合は、背に表装材が直接貼られている。芯材のある背表紙では、本の背と背表紙との間に空間ができる場合(穴あり)とできない場合(穴なし)とがある。しかし背表紙の構造と柔軟性にはあまり関連性がないように思っている。柔軟な背の本では、本の開閉時に発生する負荷が少ないと考えている。

## 2. 劣化

製本構造の劣化と材料の劣化の両方について現状を客観的に記録する。劣化は材料の劣化として顕現化するが、構造の劣化が材料の劣化に大きな影響を与えている場合が多い。保存にとって重要な劣化を読み取る力が必要である。

### 2-1 表紙の劣化

構造劣化としては表紙ジョイントの傷み(表紙の欠損、表紙の分離、ジョイントの傷みなど)、背表紙の傷み(背表紙の欠損、背表紙の分離、ジョイントの傷みなど)を記録する。羊皮紙表紙の反りにも留意する。表紙接続の構造や、背の柔軟性などを参考に

しながら劣化要因と今後の保存対策を立てることが可能である。

材料の傷みは表装材の劣化、破損、欠損、虫損および芯材の変形などを記録する。タンニン革には酸性領域で安定している性質があり、接触する紙が茶色に変色している。酸性劣化であることにまちがいないが、歴史的な所与の組み合わせでもある。近代のタンニン革は化学的劣化が深刻である。保存箱や保護ジャケットの必要性が考えられる。

## 2-2 とじの劣化

支持体の切断による表紙の分離・欠損。支持体およびとじ糸の切断によるとじの損傷(ブロックに分割、折丁単位でバラバラ)。とじ糸の切断によるページの分離。とじが切断していないが緩んでいる場合もある。針金の錆びによるページの分離。とじの劣化は、そのまま利用を続けるとさらに劣化が進行するケースが多く、専門家による修復を待ちながら保存箱に収容する方法が考えられる。

## 2-3 見返しの劣化

ノド破損は単なる材料劣化というよりは構造的な負荷による破損と考えられる。仕組みをよく理解せずに表面的な修理を施しても構造的負荷は解消されず、強い修理材料を使うと隣接する他の部位が構造的負荷を受けて破損する可能性が高い。材料の劣化とともにノド破損のメカニズムに注目すべきと考えている。19世紀以降に製本された場合には見返し用紙が酸性化する可能性がある。

## 3. その他

製本構造や材料とは別に保存情報として有用な項目を調査することも必要である。現代の酸性紙とは異なるが、手漉きの本文用紙のにじみ止めに使われたミョウバンによるものと思われる紙の変色は化学的な劣化と考えられる。水濡れや虫損などと共に本文用紙の性状と劣化についての情報は重要なものとする。製本の修理履歴や再製本に関する情報は資料のオリジナル性についての情報である。所蔵の履歴に関する情報(蔵書票、蔵書印、インクなどによる書き込みなど)。インクによる書き込みは酸性劣化の原因となる可能性があり、重度の傷みには優先的な措置が望まれる。

画像データを調査票に利用すると、調査項目だけでは理解しにくかったデータが視覚化されて理解しやすくなる。間違いにも気づきやすくなる。手間がかかるが利点も多い。

#### 4. 形態の異なる資料の調査票

冊子以外の資料を調査する場合がある。資料形態としては、書簡、草稿、テキスト、版画、地図、写真などである。これらは冊子のような構造をもった資料ではなく「1枚もの」の紙資料であり、別の調査票が必要である。

用紙の性状や記録化に使われた技法の調査が主な内容になる。記録化の技法としては、書写(鉛筆またはインク)、印刷、版画、写真、その他が考えられる。紙の形状としては、単葉か複葉、折り目についての情報、丁数、紙葉数、綴じに関する情報、手紙であれば封蝋、スタンプなどの情報、用紙の簀の目、透かし文様、色、厚さなどの情報が記録される。

#### 5. データベース化

調査票によって得た記録をデータベース化すると記録を数量化するだけでなく、検索の仕方によって様々な有用な情報を売ることが可能になる。データベースの設計には専門的な知識が必要であり、入力にも手間がかかる。入力時には調査票の未記入と誤記入が明らかになり、調査の完成度がより高くなる。

調査票によって製本構造や材料などの形態的データと傷みのデータを数量的に把握することができる。データを分析することによって潜在的な劣化の可能性を読み取ることが可能である。表紙の分離、綴じの傷み、見返しノド破損のような重度の劣化は、経年による現象というよりは利用による負荷を適切に解消出来ない製本構造上の理由があるものと考えられる。そのためにも保存メンテナンス作業が重要になる。

(資料図版を当日配布します。)







社会科学古典資料センター

Center for Historical Social Science Literature



国立大学法人

一橋大学

HITOTSUBASHI UNIVERSITY